

への支援業務（野洲市の環境基本計画中間見直し支援業務）を受託し、2011年9月から約1年かけて、近藤准教授を中心として学科教員全員で見直し支援業務を行い、2012年9月に野洲市に報告書を提出した。

2012年6月には、3回生35名と留年生5名の計40名が研究室への仮配属となった。ただし、4回生（以上）2名が取得単位数の不足などの理由で未配属となっている。

また6月末には、学科としてのゼミ対抗スポーツ大会（ドッジビー）を開催した。ゼミ対抗の球技大会は一昨年度から開催している行事であるが、一昨年度のソフトボール、昨年度のパレーボールに替わったものである。優勝は柴田研究室、準優勝は近藤研究室、3位が高橋・秋山研究室となった。学年を超えて学生間や学生と教員との間の親睦を図ることができた。

2012年11月に行われた特別選抜入試では、募集人員8名に対して推薦10名の出願があった（私費外国人留学生の出願は無し）。推薦入試の志願倍率（＝出願者数÷募集人員）は1.3倍であった（前年は1.0倍、前前年は1.4倍）。

学科広報の一環として、当学科では学科パンフレットを2008年8月に作成して学科広報に活用してきたが、4年ぶりに改訂し、新たな学科パンフレットを2012年12月に作成した。

2013年2月・3月に行われた一般入試では、実質倍率は前期1.5倍（前年1.9、前々年2.1倍）、後期1.9倍（前年1.9、前々年1.9倍）と、前期後期ともに低いレベルにとどまっております、今後検討および対策が必要である。

2013年3月には41名の卒業生を送り出した。うち4年前の2009年4月の入学生は34名である。なお同年に入学した41名の内訳は、4年で卒業が上記の34名、退学が0名、4年で卒業できなかったものが7名である。なお入学者のうち4年で卒業した学生の割合は、2007年度入学者が73%であり、2008年度入学者が69%であるのに対して、2009年度入学者は83%であり、この3年間では比較的高い割合となった。

2013年3月末で、富岡昌雄教授が定年退職される。富岡先生、県立短期大学を含めて42年間、ありがとうございました。また柴田裕希助教も3月末で退職される（東邦大学理学部生命圏環境科学科に専任講師として異動）。柴田先生、3年間、ありがとうございました。

なお4月に、2名の教員（教授、准教授）が着任するとともに、柴田助教の後任助教の公募人事に着

手予定である。

環境建築デザイン学科この一年

富島 義幸

環境建築デザイン学科長

本年は柴田いづみ・水原渉両教授が定年退官を迎えられ、また布野修司教授が副学長に就任されるなど、学科激動の年ともいえる一年であった。水原教授は本学の開学以来、柴田教授は開学2年目から、長年にわたって本学科の基礎を築いていただいた。布野先生には副学長と学科教授を兼任していただき、本年も講義や卒業研究・制作のご指導をいただくなど、学科を支えていただいた。こうした人事の変動のなかで、村上修一先生が10月に教授に昇任された。村上先生は専門のランドスケープデザインを基盤として、近江地方の調査研究にも積極的に取り組んでこられた。ますますの活躍が期待される。今後、学科人事を確定させていくなかで、これまで培ってきた環境科学部のなかの建築学科という基礎のうえに、新しい時代の要求にこたえていけるような建築教育・研究体制を築いていかなければならないと強く感じている。

本学科では、学生の国際交流を積極的におこなってきているが、本年は例年にまして盛んな年であった。まず、毎年夏におこなっている韓国の蔚山大学との合同ワークショップでは、本年はスペインのセビリア大学もあわせた「2012年滋賀県立大学・蔚山大学・セビリア大学学生交流国際建築ワークショップ」として9月21日～23日に開催された。3大学あわせたおよそ60名の学生が混成の14チームをつくり、長浜を舞台に「歴史が融合する街“長浜”ウェルカムセンター計画」ととりくんだ。さらに2013年1月2日～4日、本学科学生19名と教員2名がスペインに渡り、バルセロナ・アンダルシア地方の建築視察、セビリア大学との合同ワークショップをおこなった。ワークショップのテーマは改修中のサン・ルイス教会およびその周辺地区の新しい利用法を提案するというもので、日本の学生4～5名とスペインの学生2名が1チームとなり、様々な提案をおこなった。

環境建築デザイン学科は、東日本大震災発生直後から復興支援に取り組んできたが、その活動が評価され、平成24年度京都新聞大賞「教育社会賞」を受賞した。学生たちの被災地支援組織である「木興プロジェクト」による漁港の集会施設「番屋」、同

じく「たけとも」による建設や地元で採れる竹を用いた集会所「竹の会所」は、東日本大震災によって壊滅的打撃を受けた地域に被災者が「集まる場所」を提供し、さらにそこでおこなってきた学生と地域の人々との交流活動が評価された。とくに「竹の会所」はJIA日本建築大賞も受賞し、「竹の会所」と同じく陶器浩一教授、永井拓生助教らと学生のチームによって気仙沼市で進められているプロジェクト「IRONY STATIONs」がSDレビュー2012展にて朝倉賞を受賞するなど、学生をまきこんだ活動が社会的にもおおいに評価された。

この他にも本学科には、「DANWASHITSU」など学生主体のグループがたくさんあり、活発な活動をおこなっている。また、本学科では開学以来、卒業研究・卒業制作の発表会は学生が主体的に運営している。本年も、論文・作品を仕上げていくなかで、発表会場の設営から、ゲストの招聘から広報にいたるまで会を運営した。この一年は、こうした本学科伝統ともいべき学生の自主的・積極的な姿勢が、大きな受賞として結実した年だったといえるのではなかろうか。これからも、「人が育つ大学」という本学の理念を実践する学科であり続けたいと考えている。

生物資源管理学科の一年

岡野 寛治

生物資源管理学科長

学生の動向

2012年3月に63名の卒業生を送り出した。その内訳は、就職（および就職希望）が43名、大学院進学が19名（本学大学院14名、他大学大学院5名）であった。

また、2013年3月には64名の卒業生を送り出した。その内訳は、就職（および就職希望）が42名、大学院進学は14名であった。長いデフレ状況下で、今年も就職内定率は100%とならなかったが、来年度は求人が増えそうだというマスコミ報道に少し期待している。卒業時までにも、就職が決まらない学生が数名いたことは、大変気の毒であり、教職員の就職指導にいっそうの努力が必要であると痛感している。

学部では3回生の年末時から就職活動が開始され、4回生での卒業研究・ゼミに十分な時間を取ることができない現状が続いている。これまでも多くの先生が意見を述べられているが、大学の学士力

が企業等から熱望される中、学部と大学院の一体教育が必要な状況となっていると小生も考える。今般の家庭の経済状況から難しい面もあるが、大学院への進学率のいっそうの向上が望まれる。

2012年4月には61名の新入生を迎えることができた。学年別の学生数は、2013年3月末で、1回生60名、2回生62名、3回生59名、4回生以上10名である。4回生以上の10名については、事情は様々で、休学して外国に語学研修に行った学生も含まれる。学生指導にあたっては、従来と大幅な変更はなく、単位の取得数の少ないと思われる学生には、各学生担任が連絡を取り、事情を聞くよう努めている。本学科では学生達とのコミュニケーションを出来る限り取るよう努めており、談話会（コンパ？）が学年ごとに随時設定され、意思疎通が図られている。今年も新入生歓迎会と忘年会が、1回生から4回生までの有志が参加して和気藹々で行われたことと併せて、これらの行事が本学科の伝統として根付いており、喜ばしいことである。

学生指導の改善

本年度も18名の教員で学生の指導を行ってきたが、本年度末に滋賀県立大学開学以来、本学科の教育・研究の大きな柱としてご奮闘頂いた長谷川先生と金木先生（誕生日順）が定年退職されることとなった。両先生には名誉教授として今後も活躍されんことを願っています。それに伴い2012年度当初から、カリキュラムの見直しと後任の教員の確保を行ってきた。新年度からは、新たな陣容で学生への教育と研究がより充実したものになるよう進めて行きたいと考えている。

遡って、本年10月には全国公立大学農学会が、本学が当番校となり、開催された。限られた時間内で様々な話題について意見交換がなされた。特に本学から承合事項で提案した学部生の留年・休学状況について、私どもの生物資源管理学科の休学者および最低在学年限超過学生（留年生）数の割合が、他大学に比べてやや高い傾向にあるのではと心配したが、大差がないことが判明した。留年・休学には様々な事情が考えられるが、前述のように、教員が講義や実習の時に学生の動向を把握し、速やかに対応する必要がある。

最後となりましたが、本学科のみならず環境科学部での教育研究に重要な役割を果たしている圃場実験施設の井上氏と芝原氏も2012年度末にめでたく定年退職を迎えられた。しかしながら、両氏には来年度からも引き続き勤務していただくことになっていきますので、この学部報を読まれた卒業生の皆さん